

東京外国語会主催 文化講演会

『内なる視点』と『高みの視点』——日本語と中国語

の場合」

講師 加藤晴子 東京外国語大学大学院総合国際学
研究院教授 <中国語学>

日時：12月3日（土）午後2時—4時

（続いて懇親会）

場所：東京外国語大学本郷サテライト4階（講演）
および7階（懇親会）



プロフィール

1986年東京外国語大学外国語学部中国語学科卒，1988年同大学院修士課程修了，1988年9月～1989年7月北京大学中文系在籍，明海大学講師，同助教授を経て，2009年東京外国語大学に教授として着任。この間，1993年3月～1994年9月と2005年3月～2006年3月北京日本学研究センターに，それぞれ日本側主任教授補佐，同副主任として赴任。主要研究業績として，「中日両語の叙述の視点と動作の方向性」，古希記念論集編集委員会編『横川伸教授古希記念 日中言語文化研究論集』（白帝社，2011年）；「1. 代名詞（代詞）」「2. 動詞・形容詞」，沖森卓也・蘇紅編著『日本語ライブラリー 中国語と日本語』（朝倉書店，2014年）；「中日対訳コーパスにみる“来”“去”と「くる」「いく」の対応状況」，明海大学大学院応用言語学研究科紀要『応用言語学研究』No. 8（2006年）；「日中対訳小説に見る受身形の使用状況と視点の関係」，『東京外国語大学論集』第92号（2016年）など。

講師からのメッセージ

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

The train came out of the long tunnel into the snow country.

川端康成『雪国』のこの冒頭の一文と，サイデンステッカーによるその英訳は，すでにくっかのメディアで取り上げられたことがあるように，日本語と英語の視点の取り方の違いを示すものとされています。作者が物語内の人物と共に汽車に乗っており，一体化した視点で同じ体験をしているのが日本語原文から浮かぶ情景，一方，作者が汽車やトンネルの外，上空にある視点から人物のいる現場を見おろしているのが英語訳文から浮かぶ情景ですね。「地上の視点」と「神の視点」，「主客合一」と「主客対立」などの概念でこれまでも説明されてきています。

このような「内なる視点」と「高みの視点」の違いは，ややもすれば，東洋と西洋の違いのように捉えられがちですが，同じ東洋の言語である中国語と日本語とを比べた場合，中国語もどちらかというところ，「高みの視点」を持つと思わせるような現象を見出すことができます。

今回は，この中国語の「高みの視点」を示す現象を，小説の翻訳の中からいくつか取り上げるとともに，関連する他の事象ともあわせ，お隣の言語と日本語との意外な隔たりについて考えてみたいと思います。